

第2章 人間としての自覚 — 源流思想 —

1. 古代ギリシア思想 — 哲学のはじまり —

1. 哲学の形成

<古代ギリシアのポリス社会>

奴隷制に立脚した民主政治……市民は食べるために働く必要なし（奴隷に働かせるから）



- ▶ 閑暇（^{かんか}スコレー、scholē）を利用して学問・文化にはげむ。
- ▶ 哲学…… フィロソフィア（philosophia、ギリシア語）＝「知を愛する」
philo（愛する）＋ sophia（知）

<自然哲学のはじまり>

- ▶ 神話的世界観……自然現象を神話（ミュトス、mythos）によって説明
- ↑↓
- ▶ 自然哲学……自然の根本的原理（アルケー、arche）について、
迷信にとらわれず、理（ロゴス、logos）にかなった説明を与える。
 - ・ タレース ……万物の根源は「水」、日食の予言
 - ・ ヘラクレイトス ……“万物は流転する”＝変化しながら調和している
万物の根源は「火」
 - ・ パルメニデス ……運動・変化を否定（←空虚は無い←有るものだけが有る）
 - ・ ピタゴラス ……万物は数的に調和している。三平方の定理
 - ・ エンペドクレス ……万物は4つの元素（火、土、水、空気）で構成される
 - ・ デモクリトス ……世界は、原子（アトム）と空虚から成っている。

<ソフィスト（職業教師たち、ギリシア語：sophistes）>

民主政治においては、「議論」の上手さが重要。

→ 巧みな説得の技術（弁論術）を教える教師たちが多数出現

- ▶ アレテー（arete、徳）……＝そのもの固有の良さ
例えば競馬馬のアレテーは「速く走ること」
ソフィストたちは「ポリス市民の徳＝弁論の技術」と考えた

語る内容が真理であるかどうかは問題では無く、多くの人に真理であると思わせればよい。

- ▶ 相対主義 ……真理の規準は人によって違う、という考え方
代表的ソフィスト プロタゴラス の言葉「万物の尺度は人間である。」

※道徳は自然法則（ピュシス）ではなく人為的なもの（ノモス）である。

だから、人によって場所によって時代によって変化して当然である。

2. ソクラテス (469 ~ 399.BC) ……「倫理学の父」

ソクラテスは著作を残していないが、弟子のプラトンがソクラテスを主人公にして書いた多くの「対話篇」がある。これらは、どこまでがソクラテスの思想で、どこからがプラトンの思想なのか区別し難い。だが、さしあたって、ソクラテスの裁判の場面を描いた「ソクラテスの弁明」については、他の記録とも照らし合わせることで、ソクラテス自身の考え方をよく表していると考えられる。以下の内容はすべて同書に書かれていることである。

<無知の知>

「ソクラテスほど賢い者はない」とのデルフォイの神託を授かる (友人を通じて)

↓

知者 (ソフォス) とされる人たちとの問答の中で「無知の知」に到達

本当は知らないのに知ったかぶりする者よりも

知らないということを自覚して本当の知を追い求める者のほうが賢い

※「汝 (なんじ) 自身を知れ」……デルフォイのアポロン神殿に刻まれた格言

(もとは“身のほどを知れ”といった意味だった)

<魂への配慮>

「自分自身の魂 (プシケ、psyche) がすぐれたものになるように配慮せよ」

= “魂に徳 (アレテー) が備わるようにせよ”

<徳知主義>

ソクラテスの考える「徳」= 善美のことがらについての普遍的な真理である「知」

そうした知を持つことが、徳であると同時に幸福でもある (福德一致)

→正しい生き方がわかれば自ずから正しく生きるはず (知行合一) と考えた

<問答法>

人々 (特に若者たち) と「問答」をする。=問答法 (助産術)

“教える”のではなく、問答の過程で自ら真理に到達するのを助ける。

※もちろん、ソフィストたちの弁論術 (相手を議論でうち負かす) とも違う。

その具体的手法= エイロネイア (=皮肉, eironeia = 英 irony)

自分が無知であるかのようにふるまうことで、逆に相手の無知をさらけ出させる

ソクラテスの考える「哲学」

対話・問答 (ディアレクティケ) を通じて魂のすぐれたあり方を研究すること

<ソクラテスの処刑>

「若者を惑わす者」として死刑の判決を受ける。(←陪審員の多数決で)

⇕

「単に生きることでなく、善く生きることが大切」 ←プラトン著「クリトン」

「他人から不正を受けても、不正をもって報復してはいけない」

→自ら毒を飲む。(自殺ではなく、それがアテネの処刑方法だった)

3. プラトン (427 ~ 347.BC)

ソクラテスの弟子。主著「ソクラテスの弁明」「パイドン」「国家」など

<イデア論>

◆ イデア ……厳密な知識の対象となり得る**真の实在**

「善」「美」「人間」「円」「椅子」「馬」… など全ての物事に、「~の理想型」がある。

プラトンは、**イデアが実際に存在する世界（イデア界）が**
現実の世界（現象界）とは別にある、と考えた。

◆ 洞窟の比喩

多く人は「洞窟の中で事物の影絵を見て暮らしている」ようなものだ。
= 現実世界のあらゆるものは「イデアの不完全なコピー」でしかない。



事物の本物の姿を見定めるには「**魂の全面的な方向転換**」
つまり、イデアを求めようとする必要がある。

◆ 人間の魂は、もとはイデア界で生まれたため

イデアを「想起する」(アナムネーシス) ことができる
イデアに対して憧れる気持ち (エロース) を持っている



人が理想に向かって努力する時に道徳が発揮される。= **理想主義**の哲学
すべてのイデアのうち究極・最高のイデアは「**善のイデア**」である。

<哲人政治>

人が「よく生きる」ためには、国家が正義にかなったものでなくてはならない。
彼は実際に、南イタリアのシチリア島シラクサにおいて政治に携わったこともある。

理想国家… “哲人国家”

- ① 知恵 を持つ統治者… 哲人政治。「哲学者が政治をすべきである。」
- ② 勇気 を持つ軍人
- ③ 節制 を持つ生産者

この3者のバランスがとれている状態 = 正義 が実現されている。



※ ギリシアの 四元徳 ……個人の中でも**知恵・勇気・節制**のバランスをとって
正義の状態を保つことが人間の幸福である、と説く。

※古代ギリシア哲学の特徴

- ①. 「人間は理性（ロゴス）を持つ動物である。」……アリストテレス
観想（テオーリア）＝真理を理性的に探求する
- ②. 「人間はポリスの動物である」……アリストテレス
ポリス社会の共同体生活における倫理を探求
- ③. 調和や均整を重んじる
世界をコスモス（調和と秩序のある宇宙）とみなす（⇔ カオス・混沌）
音楽・詩文・体育によって心身の調和的發展を図ることが人間教養の理想

5. ヘレニズム時代の哲学

<世界市民主義と個人主義>

アレクサンドロス大王によるギリシア＋オリエント＝ヘレニズム世界征服
→ポリス共同体という枠組みがなくなる。

- ▶ 世界市民主義（コスモポリタニズム）……世界市民（コスモポリテース）
- ▶ 個人主義

<快楽主義と禁欲主義>

◎ エピクロス（342-271.BC）……エピクロス派（快楽主義）

精神的快楽＝“精神的平安”（アタラクシア、＝「わずらうことがない」）

「隠れて生きよ」＝個人主義

「質素な共同生活で生まれる人間の心のふれあい」を最も価値の高い快楽とする
（「エピクロスの園」という庭園学校……婦人・奴隷という差別のない共同体）
一方、閉ざされた社会への逃避という「マイホーム主義」的マイナス面も

◎ ゼノン（335-263.BC）……ストア派（禁欲主義）

欲望を抑えること＝無情念（アパテイア、＝「情念（パトス）がない」）

「自然（ピュシス）に従って生きよ」 physis ⇔ nomos（ノモス、人為）
＝世界市民主義（自然のロゴスは世界共通だから）

→ローマ帝政期のセネカ（ネロ帝の師）、エピクテトス（奴隷出身）、
マルクス＝アウレリウス＝アントニヌス帝（五賢帝の最後、『自省録』）

◎ プロティノス（205-70）……新プラトン主義

「一者、完全に一なるもの」からの流出により世界は構成される。
初期キリスト教神学（アウグスティヌスら）に影響を与える